

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1)事業名	ニジェール共和国 クオラテギ村の寺子屋を軸とした生活改善に向けたコミュニティ調査事業
(2)実施団体名	一般社団法人コモン・ニジェール
(3)実施期間	2017年5月9日～2018年1月31日
(4)実施国	ニジェール共和国
(5)活動地域	Kollo 県 Koira Tegui 村
(6)活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>当団体は、2015年4月より Kollo 県 Koira Tegui 村で運営している寺子屋を軸とした村全体の生活改善を目指している。村民がいずれ寺子屋を自ら運営し、将来的には寺子屋も不要となり、子供たちが家業の手伝いをせず小学校に就学できるような経済環境を創りあげる為に、村全体の経済的底上げと教育重視の意識啓蒙を図ることが必要と考えている。寺子屋の初年度が終わった時点で児童の 12%が小学校への転入が叶った。また、日本からの種で婦人達がかぼちゃを栽培し現金販売に取り組むなど、識字教育の枠を超えた活動も始まっている。この先は、子供達の就学を阻む様々な要因は何か、村の生活向上と安定に足りない要素は何か、定性・定量の両方の調査を行い、村全体の状況をより詳細に把握し、戦略的に生活改善策を図らなくてはならない。この調査を基に、コミュニティ全体の実情とそこに至った経緯、また、住民自身がどのように状況を認識し、どのような将来を希望しているかを把握しなくては、真の自立支援を達成することは極めて難しい。本申請事業においては、その観点から、コミュニティの根底を理解することに最大の重点をおく。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>経済面、保健衛生面、栄養面(自家消費・食料セーフティネットとなりえる農作物生産の模索含む)の現実的な支援策を練る検討材料を集め、寺子屋の位置づけを超えた観点で村の生活向上の道筋をつけたい。また、外国人である我々のイニシアチブで調査を実施することが村の人々を精神的にエンパワーし、意識向上を支援するのも副次的な狙いである。国全体の貧困状態、治安の悪化、外国人コミュニティの退去、情報不足、生活の改善につながりそうな事物へのアクセス不良等、ニジェールの庶民の精神的な活力や自己肯定感・未来志向的発想は行き詰る一方である。大規模な国家間の支援事業を行うのは困難な状況だからこそ、民間の小規模で前向きかつ長期的な活動を少しでも続けることで、これまで日本・日本人が行ってきた支援を無駄にすることなく、ニジェールの人々を応援し続けることが従来にもまして必要だと関係者一同強く感じている。</p>

2. 業務実施結果：

(1) 実施した内容

【実施内容① 調査項目の策定】

5月～8月をかけて、他の類似調査プロジェクト等のリサーチをした上で、日本側で質問項目を練って仏語訳し、日頃クオラテギ村の人々と関わっている現地スタッフの意見を取り入れて最終的なものとした。

【実施内容② 現地での説明会と実調査】

調査項目の最終調整と平行して、調査員のリクルートや、村への調査受け入れ打診を行ったところ、当初調査を希望していた9月10月はミレット（ひえ・粟）の収穫と重なることから調査員リクルートも村人の協力取り付けも難航し、11月に調査員を確定・指導し、12月に調査を行うこととなった。実際には、9月には大洪水が起り、また、12月23日に村長選挙が行われることが決まったため、日程調整が更に難航したが、結果的には現地調査を2017年12月21日から2018年1月9日の連日行うことが出来た。余裕のない日程となったが、1対象あたりのインタビュー時間は十分にとることができた。調査は5人の調査人が20日間通って、250世帯から回答を得ることが出来た。村人の協力を得るにあたっては、まずは家長らを集めて調査の範囲と説明がなされ、同意を得られた家長達へのインタビューとなった。

【実施内容③ 調査結果の集計、取りまとめ】

この遅延により、調査回答のデータ入力、集計、分析がプロジェクト期間内に完了できなかったが、もっとも費用のかかる現地調査部分が完了できたことに心から安堵し、幸いなことと考えている。当初、データ入力は日本のスタッフが行う予定だったため人件費を計上していなかったが、250世帯もの協力を得ることが出来、アンケート用紙が膨大な量となったため現地で入力を行うこととした。しかしながら、入力スタッフが日本人スタッフほど馴れていないため、作業時間がかかっており、本報告書提出時点で全ての入力が終わっていないことは、大きな反省点である。

(2) 実施成果：

アンケート項目は添付の参考資料のとおり、統計的な項目、親の教育程度、子どもの就学状況、家の手伝い状況、家族の収入源、病気・衛生管理、食事・栄養の状況など、アンビシャスに幅広いものを盛り込んだ。そのため、実際の調査で聞き取りきれなかった項目があったり、集計に手間取ったりしているという反省は大いにあるが、村人の状況が随分と詳細に見えてきたことは、今後、寺子屋を中心として村おこしを考えていくにあたり大きな成果だと言える。

以下の記述は、現在データ入力が進んでいる 100 世帯分のデータを俯瞰したもので、最終集計したものではないが、現時点の成果としてご報告に値すると考える。

●疾病・衛生面。クオラ・テギは砂漠地帯の村と違って川に近く「水」へのアクセスはある反面、実際には水辺ゆえの疫病（マラリア・コレラ・住血吸虫症）に多くかかっていることも、「清潔な水」へのアクセスは確保されていないことも、確認できた。

●識字率・教育面。現時点で 100 世帯の家長のうち、学校へ通った経験があるのは 29 人（29%）と分かっている。中には、学校に通ったとしながらも読み書きはできないと回答しているケースも複数あり、就学したものの授業に十分出席できなかったことが想像される。寺子屋での「大人への授業を望むか」という質問には全員が「望む」と答えており、教育を十分に受けることができていないことに対する危機感が確認される。当団体の寺子屋への期待やニーズも、我々が思っていた以上のものがあつた。

●食料調達。現在集計できている範囲では、100 世帯中 96 世帯という高い比率で畑を所有していることが分かった。自給自足でまかなえる家庭も多い様子である。しかしながら、「現金収入はあるか」という問いに「ある」と答えたのは 46 世帯にとどまり、「畑を持っているが現金収入がない家庭」が多いことから、まさに、「食うには困らぬが食うために必死な思いをしている」というところが察せられるし、食料調達としての畑仕事のため、子どもを学校に通わせる余裕がないことも見て取れる。

また、調査票の末尾に自由回答として「日々の心配事とその解決策案」の項を設けたところ、150 回答分の集計が先行して上がってきたので紹介したい。[複数回答有り、多数順]

日々心配なこと		解決策案	
病気にかかっていること	101	誰でもいける学校を増やす	113
読み書きができないこと	98	医療機関を増やす	98
きれいな水を確保できないこと	93	給水塔を建てる	92
食料の確保	82	予防注射	76
病気でも薬の確保が出来ないこと	76	農業の知識を得る	62
学校にいけないこと	50	深井戸を掘る	37
インフラが悪い		舗装された道を増やす	22

以下は、「コモン・ニジェールに期待すること」として得た回答である。

- (1) 寺子屋を続けて欲しい (128 回答)
- (2) 農業を教えて欲しい (44 回答)
- (3) 薬の調達 (42 回答)
- (4) いろいろなことを教えて欲しい (28 回答)
- (5) 食料を調達して欲しい (17 回答)

上記を総合的に解釈すると、●衛生的な環境、●そのためのインフラ、●経済力の脆弱性、また、●教育を受けていないがゆえにそれら全般に対する脆弱性から脱することが出来ないでいるということ、我々外国人に示されるまでもなく村人自身がしっかりと課題と対策を認識していることが確認できる。これは大きな成果である。これまで、あくまでも我々の印象論として「彼らはわかっている」としていたが、数字で把握できることの意義は計り知れない。解決策の案として「誰でも行ける学校を増やす」が最上位にある点からは、現状を脱するために教育が必要だという認識が村人の間に非常に高く、実際の飢餓・困窮感以上に、教育・知識への飢餓感のほうが強いようにさえ感じられる。また、このことが示唆するのは、村人たちは決して絶望に支配されてはおらず、教育を受けて暮らしを改善したいという意欲がある・前向きであるということだ。それを知ることが出来たのは、何よりの成果であり励みだと考えている。

(3) 得られた教訓など：

こうした調査プロジェクトを行うのが初めての当団体としては、全てが教訓であり反省でもあり成果でもあった。主な教訓・反省点としては、協力してくれる回答者の目算が甘かった（ある意味では悲観的だった）ために、予想以上に多くの村人が協力してくれた結果、ニジェールの現地スタッフの負担が膨大になってしまったことがあげられる。次回このような機会があれば、集計用の表もこちらで作成して提供するだけでも負担が軽減できたかもしれないし、データ入力の人件費や日本に DHL 等で紙媒体で送ることが出来るような資金を予め見積もって送金しておくべきだった。

それでも、この予想以上の負担に応えてくれる協力者を現地に得られることは、団体として財産である。頻繁に顔を合わせて打ち合わせることができない中でも信頼関係を一段階深めることができた、日本側では考えている。また、今回調査員として協力してくれた5人の中には、クオラ・テギ村を知らずに出向いたメンバーもいたが、都会の比較的恵まれた若者が郊外の村のことや当団体のことを知ってくれたことは、ひょっとすると何らかの教育的要素もあったのではないかと期待する。全ての作業が済んだ段階で、現地スタッフらにヒアリングをしたいと思う。

なお、余談として済ませるには残念なことであるが、末尾の自由回答欄において「日本という国を知っているか」との問いでは、150人中32人が「知らない」と回答している。日本を知っている人びと

の間では、「美しい国」「良いことをする国」「進んでいる国」という前向きなイメージがもたれているものの、一般的な日本人が期待するほどの知名度ではない。このことから、当団体が、たとえ小さな村を対象とする活動であっても、地道に支えていくことによって、日本全体の認知度に貢献できればという思いも新たにした。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

ニジェールの成人識字率は平均 15%（男性 23%、女性 9%。2012 年，UNICEF*）。

最低でも、寺子屋を現状維持することが必須である。

要望に応じて大人クラスを設けるためには、教員の確保も必要となるし、カリキュラムも独自に練る必要がある（子どもクラスはニジェール文科省の課程に準じている）。恐らく、資源作物や市場用作物の栽培方法や販売スキル、また、水の浄化方法等の実利的な技術の指導を兼ねた識字教育などが馴染むのではないかと見当をつけている。* (<https://data.unicef.org/topic/education/literacy/>)

当団体のような資金も規模も小さな団体として提供すべき技術や知識は、持続可能性を最大限に考慮して、あくまでも小規模で安価なものであらねばならないとも考えている。これらの指導ができそうな日本国内外の小規模 NGO や企業との連携なども視野に入れていきたい。

ニアメで諸調整の中心的役割を果たしたスタッフからは、村人らは調査に協力して声を伝えたからには次のステップ・支援があるとの期待感が感じられると報告を受けており、ヒアリングをただでこのまま済ませてはならない。少しずつ取り組んでまいりたい。

また、現地スタッフや調査員らからのアドバイスとして、本格的に次のプロジェクトを練るにあたっては、村の歴史、コミュニティとしての生活、社会的結びつきの問題、村の資源などにも焦点をあてて進めたほうが良いという的を射たコメントも得ている。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

以下は、主にニアメで調整役を担ったスタッフの談である。

まず、調査のために現地に行く時期を調整することとにかく苦慮した。これは、企画段階の日本側スタッフの配慮も至らなかったことで、大いに今後のプロジェクト実施に参考となる経験であった。一方、調査活動そのものについては、極めて前向きなコメントが届いている。

調査票の質問項目などは、あらかじめ家長らにも了解を得ていたため、聞き取りそのものがスムーズに行えた。それに加えて、調査員として参加した5人が十分教育を受けていたメンバーだったことや、村の現地語（ジェルマ語）を使える調査員を得たこと、また、1調査対象あたりの時間を十分に確保できたことにより、調査対象とのやり取りも活発に行えたとし、詳細な意見を聞き出すことができたとの充足感が得られた。

他方で、その分、村人からは、次なるコモン・ニジュールのプロジェクトへの期待感が当然高まっており、調査結果のとりまとめと分析レポートを完成させることはもちろんのこと、実質的にどのような還元ができるのか着実な検討が必要である。この点では、日本側の我々だけでなく、現地で今回の調査に参加したスタッフの意気込みも増しているため、彼らからもより良い示唆を得られることだろう。調査分析はまだ完結してはいないが、村人からのインプットを得られ、人間関係も深まったことにより、チーム全体・団体全体として「やってよかった」という一体感を得られたことは、このJICA基金の枠組みに最も感謝すべきところと感じる。村人を失望させぬよう努力していく必要がある。

(2) 活動の写真

*活動の様子がわかる写真がありましたら添付下さい（枚数は問いません。多い方が望ましいです。またキャプション（説明）を簡単に付けて頂ければ幸いです）。

[アンケート調査についての説明会の様子]





[家長たちへの聞き取りの様子]





